

口述 多田ヨネ

訳注 田村将人

1. はじめに

これは、平成9(1997)年8～9月、平成10(1998)年3月、8月に、多田ヨネ氏を訪ねて、田村将人が聞き取りした内容(一部を除いてDATに録音)を公開するものである。なお、記述方法は、多田氏の口述の通りとはせず、本人の意思を損なわない範囲で田村がまとめたものである。したがって、本稿の文責は、訳注者の田村にある。

ここに聞き取りの内容を発表しようと考えたのは、多田氏の出身地である、南樺太(サハリン)の東海岸北部の新問地方の民族誌的記述が皆無に等しいためである。そのため、聞き取りの過程で、田村からあえてアイヌ語の単語を持ち出したということもある。それは、これまでの研究者による記述の確認と補充、または新しい知見を得るためであり、その際は細心の注意を払ったつもりである。また、註釈部分で北原次郎太氏、丹菊逸治氏との共同の聞き取りを活用させていただいている。快諾された両氏、そのほかご指導をいただいた多くの方々にもお礼を述べたい。合わせて、多くの方々のご批判、ご教示を賜りたいものと思っている。

全体の項目については、北海道教育委員会『アイヌ民俗文化財調査報告書』を参考にした。本文では、アイヌ語はカタカナとローマ字を併記することにし、北海道教育委員会の『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ』の表記法に準拠することにした¹。紙幅の都合により、カタカナは初出のみ表記する。また、多田氏による補足・言い換えは()を用い、氏によるアイヌ語の解釈は「 」を用いた。単語間の～は音の揺れをあらわした。また、田村の質問、そのときの状況説明は[]を用いた。短いコメントもこれで表す。

2. 多田ヨネ氏のプロフィール

大正6(1917)年4月8日、当時の樺太敷香支庁敷香郡泊岸村古丹岸(コタンギシ)で生まれた。そして、幼少時に両親が亡くなってからは、父親の妹である多田アキ氏に元泊支庁元泊郡知取町東柵丹(サッコタン)の漁場で育てられた。その後、泊岸村新問の樺太庁によるアイヌの集団集落に移ることになる。つまり、ここでの口述は主に、昭和23(1948)年に北海道に移住するまでの約30年間で経験した、新問地方での伝統的なアイヌ文化についてである。特に、「昔の人は…。アイヌは…。」と氏が意識していることである。

¹ここでのアイヌ語の音素表記は暫定的なものとする。音節末の-rは-rVとする[丹菊1998]。長母音は聞こえたとおりとする。音が高く聞こえた箇所には、áのような記号を用いる。

次に、多田氏の事績について管見の限り挙げたいと思う。

まず、北海道立図書館所蔵の知里眞志保遺稿ノートに、昭和 26(1951)年 6 月 22 日網走市郷土博物館で樺太アイヌの方々が集まって踊り歌などを録音したときの同氏のメモが含まれているが、この中に多田氏が歌ったとされる「Yaikatekara」の歌詞も記されている²。次は、ピウスツキのろう管の聞き取りへの参加であり、昭和 60(1985)年 10 月 14 日放映 NHK ETV8「カラフトアイヌ望郷の歌」というテレビ番組でも触れられている。最後に、藤村久和、若月亨編 1994『ヘンケとアハチ』の「一新間地方のくらし」に、多田氏の貴重な回想録が掲載されている。

なお、以上の記録では二つの姓が使用されているが、本稿では、本人の希望により旧姓の多田姓を使用する。

3. 新間とその周辺

- ・サッコタンは、サッテコタン *sátte-kotan* 「水のあまりない川(コタン)」のこと。*sátte* は「乾いた」という意味。
- ・大正 8 年に新間にアイヌが集められた。それまでは、新間には少ししかアイヌがいなかったらしい。コタンギシ、ナヨロ、トヨクシ、多来加などにアイヌがいたということである。新間に来てから名字をもらった。
- ・新間には、木がととてもいっぱいあった。ニーナウシ *niina-ús* 「薪を取りに行くところ」から来ている。ニートウイエ *nii tuyé* は「薪を切ること」。² [これとは、直接関係があるとは言わなかった]。
- ・トヨクシ[問串]は、「土小屋[冬の半地下式住居]のあるコタン」[ここに *toycise* があって、行ったことがあるというから、それとの混乱であるかもしれない]。
- ・ノテウシ *notéusi* [能手戸岬]というところに新間の浜のイナウシ *inaús* があって、海のカムイ *kamúy* に、イノミ *inómi* する「祈る」。
- ・オタモイ *otámoy* というどこかの岬の名前を聞いたことがある。
- ・多来加には、小さいころ何度か行ったことがある。
- ・樺太の知床半島の山には、ケナシ *kenási* があって、クロユリは新間では 4~5cm くらいでも、ここでは 7~8cm くらいで大きい。アイヌネギばかり。舟で行ったことがある。
- ・森誠蔵氏は、アイヌ語の名前はモヤンケ *moyánke*。新間のアイヌ部落の村長だった人。コタンコロニシパ *kotán koró níska* 「村長」。奥さんの名前は、日本語の名前は忘れたが、アイヌ語の名前はハンク *hánku*。
- ・[山本 1970 の p.218 図 21 の人物は]東清松氏の母親で、多来加に住んでいたウサルシペ *usarúspe*

²このNHKによる録音資料の内容は、アイヌ民族博物館 1996『樺太アイヌ-児玉コレクション』掲載のリストを参照されたい。しかし、この中に多田氏の歌も名前もない。

だかサナルシペ sanarúspe だとかいう名前だったと思う[図 20 が木村ウサルシマ氏であるのとは関連はないと思われる]。何度も行き来があったが、いつもオッコ ókko を着てアイヌの格好をしている人だった。自分の村を守ると言って、新聞に移住しなかった人。新聞にもよく遊びに来ていた。

- ・新聞には、サンカオチャッチャ(ヘンケ) Sánkao cátea(hénke)というトウスクル tusúkuru がいた。私が物心ついた頃には 70~80 歳くらいだった。中国の方から来た人(キリヤークかも?)との子供だそう。Sánkao は中国の方の地名だという。山川さんのおばあさんと一緒にになっていたような気がする。
- ・オタスの杜には、キリヤーク Kiriyaaku、オロッコ Órokko が住んでいた。Órokko はトナカイを飼っていて、良い人たちである。多来加辺りでは混住していて、婚姻の関係もあった。
- ・支那人[初めの頃はこう言っていたが、思い出してからは次のように]、マンチウ Mánciw とかチャンタ Cánta という人たちは、Kiriyaaku、Órokko とは違う。彼らは、何のことない貂([hoynu と聞いたか?])ホイ hóy かホイヌ hóynu)の皮を欲しがって買いに来て、着物などを持ってきて交換したりした。敷香まで山の細道をたどって来て、それから新聞までものを売りに来る。橇に乗ったり、乗り馬などで来たそう。[いつ頃の話か?]私が生まれた頃の話じゃないか。
- ・樺太には、北海道のアイヌがいっぱい働きに来ていた。[新聞の布施サト氏の夫君は、常呂出身の平太郎氏である]
- ・ロシア人(ロスケ、ロスカイ)は、ヌチャ Nucá と言った。アイヌでも、ロシア語を話せる人が多かった。
- ・シーサン Siisan「日本人」。

4. 動物について

- ・セタ seta「犬」。犬を繋ぐ木はセタクマ setá kuma という。家の脇にある。[『住居と民具』p.120 の図を見て]イナウ ináw は見たことがない。丁寧な人はやるんだろう。[seta kot nii や seta koh nii は?]そういう言葉は知らない。柱は太い。犬はけんかをしないように間隔をあけて繋いでおく。オスとメスは違う kumá に繋ぐ。犬の座るところには浅い穴を掘り、干し草を置いておくと、自分で潜っていく。ここを、セタオマイ setá omáy という。この干し草は馬が食べる草と同じで[牧草のような草]、秋に女が刈り取って干しておくもので、濡れたりすれば、広げて乾かしていた。犬のことは、sapákka[<ロシア語 sobaka]ともいう。
- ・猟には、勇敢で利口な犬を一頭だけ連れて行く。喧嘩になるからだという。
- ・犬橇はヌソ nusó という。先頭は利口な犬。人を乗せる場合は 10~15 頭、荷物を乗せる場合は

20～30頭で曳く³。馬よりも早く進む。荷物や人が乗る櫓自体はシケニ *sikéni* という。お客さん用は巾が広く、敷布団でくるみ、湯たんぽで暖かくする。

- ・櫓を曳かせる犬は、メスに気が行かないように睾丸を抜くという話を聞いたことがある。施術の様子は見たことはない⁴。
- ・犬をつぶすところが、家や *setá kumá* から離れた場所にある。犬も自分がつぶされるということが分かっていて、そこへ連れて行かれるまでに、ずいぶんと泣くものだ。狂暴な犬をつぶして、セタルシ *setá rús*「皮」を服にしたり、肉を食べたりした。犬の肉はさっぱりしていて、トッカリよりもうまい。塩煮して肉と汁を別々によそう。年寄りは汁を好んで食べた。犬も血統を追って、優秀な犬を育てる。馬が入ってから、馬櫓に変わっていった。犬の頭骨は *inaús* に向かって右横に別に置く[詳細は不明]。
- ・犬の餌は、主に朝と晩に、マスの干魚と菜っ葉を煮たものをやる。昼には少しだけ干魚を煮たものをやる。魚の獲れる時期は生の魚をやったり、トッカリの肉をジャガイモを入れて大きななべで煮たものをやった。また、トッカリの脂を取ったときに出る、筋やかすも餌にする。トッカリの頭骨以外の骨も餌にする。
- ・ヤマイヌというオオカミとはまた違うものがいて、凍死体などを食べたり、マタギを襲ったりしたという話を聞いたことがある。
- ・トッカリ[アザラシの総称]やトドは海の *kamúy*。トッカリはよくマサラ *masára*「砂浜から少し上がった草の生えているところ」に寝転がっている。
- ・私は小さい頃、よくその辺にある棒で、浜にいるトッカリの頭を一撃にして、殺した。一発で殺さないと、ウワッウワッとか、チョクチョクワーとかかって来たりして怖い。死んでしまうと、男が3人がかりくらいで運んで、解体して肉を食べた。おばあさんが、ヨネよくやった、と誉めてくれた。
- ・肉を取った後は、頭は米や豆などを詰めて、*ináw* でこしらえて、送る。流氷のあるうちは、堅い氷を渡って、海の開いた場所で送る。流氷がなくなってからは、舟に乗って沖で放す。
- ・コンクリ *kónkuri* は、白と黒のかすり模様である。パークイ *paakuy* かポンペ *pónpe* の子供じゃなかったかな？ゴマフアザラシの小さいやつだったかな？
- ・パークイ *paakuy* は中ぐらいの大きさ。肉が一番おいしい。
- ・ポンペ *pónpe*「ゴマフアザラシ」は、皮が一番柔らかい。
- ・アムシペ *amúspe* は皮がかたく、靴底などに利用した。

³ この当時は犬櫓を使つての輸送業を営んでいたということで、規模も大きかったようである。

⁴ 言うことを聞かない犬は、尾を切る。

- ・トッカリから取れた油をカムイケーkamúy kee という。ほとんどの料理で使われる。キルナ〜キルプ kirúp〜kirúpu「生の皮下脂肪」。トッカリは殺してからすぐに油を取らなければ、おいしくなくなる。2、3 日でも経つとおいしくない。脂肪を細かく刻んで、スーsuu「鍋」で何回も移してあぶる。長い柄のソールンペ soorunpe でかき混ぜる。ピセ pisé「胃袋」、カムイピセ kamúy pisé「トッカリの胃袋」は春先に獲ったものを使い、たいていは一年経つと新しくした。これに油を入れて保存した。一軒で 5〜6 個持っている。この油も、おいしくないものは犬の餌にしたり、捨てたりした。また取ればよいから。
- ・トッカリの皮は、肉と剥がしたら、脂を取って揉んで、柔らかくする。ピーンと張った状態で乾燥させる。1 ヶ月くらいの間、その繰り返しで、1 日に何回でもひっくり返す。家の壁に釘で刺してある[?どのように掛けておくのかは未確認]。
- ・エタシペ etáspe「トド」の油は多く取れるし、貴重品だった。西海岸には多いが、東海岸には少ない。
- ・新聞でもイソンクル isónkuru「猟師」が、子供のクマを獲って来て、飼っている。親子のクマであれば、両方養う[?]。新聞でもイヨマンテ iyómante「クマ祭り」があつて、2、3 回参加したこともある。14、5 歳の頃だった。私が 16、7 歳の頃にあつてそれっきりだ。ヘチリ hecíri「踊り」をする。
- ・頭だけに ináw をつける。頭だけをニーソシ niisos に入れる。肉をまわし食ひした。
- ・クマの皮はイソルシ isó rús。
- ・キツネはよく食べた。inaús に頭骨をあげる。人をだます動物で、イホマ ihóma「罰が当たる」なので、飼うことはない。キツネにだまされるという話が多い。
- ・エルム erúm「ネズミ」。ネズミのかじったものは犬も食わない。
- ・シカは新聞の辺りにはいない。オボカイ opókay[ジャコウジカ]の肉を食べたことがある。塩でゆがいて、水を切って、肉だけを食べる。さっぱりしている。味噌汁の実にしたこともある。
- ・トナカイをオタスの杜で初めて見たときは、枯れ木が動いているのかと思ってびっくりした。多来加の辺りは、トナカイの皮を使ったものが多い。新聞辺りでは獲る人がいなかったなので、犬やトッカリの皮が多い。
- ・マシ mas「カモメ」。皮をむいて、肉を塩でゆでて食べる。脂があつておいしい。漁網にかかつて死んだものや、isonkuru は散弾銃で獲る。
- ・エトゥッカ etúkka「カラス」。年寄り、これは浜のカラスか山のカラスかと区別していたが、私には分からない。イシカエトゥッカ íska etúkka「泥棒カラス」。
- ・チカネ cikáp「鳥」。

- ・ヘモイ hemóy「マス」が川を遡るときに、背中の飛び出たのをたたいて、流れていくのを拾った。浜にあるような、手頃な丈夫な棒でたたく。[特別な棒か?]いや、どんなのでも良い。[大きさ、雄、雌などで呼び分けはあったか?]いや、知らない。大きいのはポロヘモイ poró hemóy。小さいのはポンヘモイ pón hemóy くらいだろう。
- ・マスは3枚におろして、保存した。まず、皮にちょっとだけ身を残して干したものは、サッペ sáppe という。サッペクマ sáppe kumá に2、3日干しておけば乾く。雨が降れば、小屋に移して、その中で形を直す。これは、揉んで柔らかくして、焼いて食べる。
- ・つぎに、身だけを切り離して乾燥させたものは、マックル mákkuru という。これも kumá にかけて干す。これは、若い人がかじって、砕いて、kamúy kee「トッカリの油」をかけて食べる。
- ・そして、頭と背骨は、犬の餌になる。冬用には乾燥させて、まとめて縛って倉にしまっておく。モト⁵ motóh という。アタチ atáci と言ったりもしたが、これは日本語だ[いまひとつ明確ではない]。
- ・また、秋、新間川のイマコタン imá kotán というところでは、小屋があつてマスを焼き干し[燻製]にしている。イキシ ikísi という。新間川には、大石さん、大山さん、森さんなどのもので、3〜4軒⁶あった。海からは1里強で、歩いて1時間以上かかる。小屋の真ん中には1畳大の細長い炉がきつてあつて、その炉の片側には、10本くらいの串刺しにされたマスが焼かれている。この串は、使いおわったら洗って干しておく。火は決して強くせずに、よく中まで火が通るように調節されている。焼きおわると、炉の上の棚で燻製にする。その後に、外にある竿の簾の上に干す。イマ imá は「魚を捕って干す」こと。ソマ somá「丸めて干魚を束にしたもの」。20匹くらいを木の皮でまとめて縛る。
- ・魚(マス)の供養として、魚の神様に ináw を作っている人もいた。[そこに inaús を作るか?]いや、川の水の流れにお神酒をあげる。もっと魚が来るように祈る。
- ・ホマ homá「マスの筋子」。ウッ uh「白子」。
- ・頭の軟骨(てんこつ)はフイペ húype「刺し身」にして食べた。昔は塩だけをつけたようだが、私の頃は醤油をつけて食べた。年を取った、歯も長くなった、ハナマガリと呼ばれるマスのそれじゃ

⁵ 森さんの、一つは兄の森東吾(isere)氏の、一つは弟の森誠蔵(moyanke)氏のものという。出来上がるまでは1ヶ月間くらいここに滞在する。60から70cmほどの束にして持ち帰る。これは丹菊・北原両氏との共同調査の情報である。

⁶ これは『日本地理大系第10巻 北海道・樺太篇』p.312の「鱒とり小屋(新間川)」の写真及び、説明文を参考にしたものである。説明には、川べりにある小屋の幣棚に、マスの頭骨が掲げられていると書かれている。貴重な写真である。多田氏は、この写真については見ずらいのもあつて、よく分からないと答えた。

ないとだめ。昔、アイヌの若い人が、若い魚を食べてあたって死んだからだという話がある。húype にするのはこれだけだ。

- ・河口からもっと川上にウッカ úkka があって、そこでマスが冬を越すという。小さいやつを放す。オホー〜オホイ ohoo〜ohóy「úkka でも深いところ」。ウライ uráy といって、じょうごのようになった網の袋に溜まった魚を捕る方法がある。imá kotán には2、3個の uráy があった。
- ・アキアジ[鮭]はチュフチェへcuh ceh という。チュフcuh とは「月末(つきすえ)のこと」。チェフcep⁷ は「魚」。「月の終わりに上る魚」ということだ。あまりいなかったし、マスの方がよく食べた。3枚におろす。骨は犬の餌になる。
- ・春、6月いっぱい、アラコイ arákoy「キュウリウオ」の漁でにぎわう。私はこの時期が一番好きだった。時化ない限りは、毎日漁がある。引き網漁なので、新聞にいたときはみんなで誘い合って行った。バケツを持っていけば、山のように分けてくれた。その時の誘い合って掛ける言葉を次のように節をつけて言った。

アラコイ コイキ ネー マヌ! ネー マヌ!

♪○○さん! arakoy koyki nee manu! nee manu! ♪

網を引くときは、次のように歌った。

ヨイサ ヨイサ(ヤッセイ ヤッセイ) アラコイ コイキ!

♪yoysa yoysa(yassey yassey) arakoy koyki! ♪

- ・キュウリウオも焼き干しにして保存した。昔は、マスと同じように一本ずつを串刺しにして、炉端で焼いた。ikisi という言葉はマスにしか使わない。日本人の改良によって、各家庭で、炉の火にあてる形で、高さ1mくらいの斜めの棚を作り、そこに釘を打ち、横にキュウリウオ(約12匹)を頭の方で突き通した棒を何段か掛けて、火に当てるようにしていた。このように保存したものを、冬など、だしを取ったり、味噌汁にした。
- ・また、若い柔らかい柳の枝(1mほどの長さ)の先から、2匹ずつ並ぶようにキュウリウオを頭から刺したものを、2つ枝の先の方で結んで、サキリ sakíri という横棒にまたがるようにかける。その sakíri の前後を2人で担ぎ、kumá に上げる。犬が届かないくらいの高さで干していた。
- ・ヘロッキ herókki「ニシン」。身欠きにする。骨と頭は犬の餌になる、[herokki motoh という言葉は?]知らない。20匹くらいを頭の方を通して干す。それを、herókki kumá にかける。かびてしまったら食べられないので、夏の間でも、乾燥して出来上がったものも、外に出して干したりす

⁷ このように同じ単語でも、発音する度に音節末の子音は h であったり、p であったりすることがある。丹菊・北原両氏との共同の聞き取りの際に確認した情報であるが、「舟」を cis と cíp とも区別なく発音した。

る。エウプシ éwpusi は、「縛ってまとめたもの」だ。冬には、その乾燥させた物を、うるかしてもどし(水に浸し)てから、煮付けにしたり、焼いて食べる。

- ・ニシンの筋子は herókki homá。ペレへ peréh とかいう料理の名前だったが、干した数の子をうるかして、柔らかくして、とろろなどを混ぜる。
- ・カパリウ kapáriw「カレイ」。
- ・ソッカナ〜ソホカナ sókkana〜sóhkana「カジカ」。顔が恐くて、おっかなかった。ナベコワシというのもいて、すごくうまかった。岩の間とかにいるので、ヤスを持って突きに行く人もいた。
- ・カンカイ kánkay「コマイ」。kánkay はアイヌ語だ。油を取る。腸も肝もおつゆに入れて食べる。冬に獲るものなので、水から揚げると一瞬で凍る。それを、尻尾の方から、スーッと皮をむいて食べる。ルイペ rúype だ。私は、刺し身が嫌いだが、これだけは食べた。
- ・トウクシ tukúsis「アメマス」。
- ・チライ ciráy「イトウ」。白身の魚。あまり数がいる魚ではなかった。
- ・冬、川でも河口に近いところで、氷に穴を開けて、ペライ peráy「釣り」をする。釣れるところがある。アプ ap「釣り針」。その穴も夜中には凍って塞がってしまうので、夜中に 2〜3 回くらい、穴掃除(氷を割る)をしに行く。
- ・スプン supún「ウグイ」。新開川河口の横のヤチのような沢に、卵が房のようにぶら下がっていた。男が、網で捕る。タモ網や、網を回して捕る。
- ・オヤウ oyáw「ヘビ」。
- ・オポンパキ opónpaki「カエル」。
- ・[蝶のアイヌ語 kapahpa、koporew は?]知らない。
- ・貝は、モコマイ mokómay という。
- ・タクモコマイ takúh mokómay「ホッキガイ[ウバガイ]」。ホッキの砕いたものとホタテを塩でゆがいて、ご飯に混ぜて食べた。これに、トッカリ油をかけて食べた。
- ・マッセイ mas sey「サクラガイ」のこと。[本人の説明と、知里動物篇からサラガイだと思われる]。わたしはこの貝が大好き。焼いたり、おつゆの実にする。
- ・カラスガイ(イガイ)のことを、アイヌの人はトンガイ tónkay と言っていた。
- ・フレチ huréci[未確認]。きれいに洗って刺し身にしたらおいしい。また、ゆがいて酢味噌和えにする。時化たら上がる。
- ・カモガイ[図鑑を指して、ヤマトサメハダホシムシと確認]。皮をむいて、焼いたりした。出汁が出るので、おつゆにするとおいしい。時化たら上がる。

- ・サシsas「昆布」。とろろにした。昔は料理は何でも昆布の出し汁でとった。マスの homá を、一晩あまりしょっぱくない塩水に漬けて、簾にあげて一日天日に当てて、それから昆布に挟んで、涼しいところに保存しているという人もいた[詳細は不明]。
- ・ノナ noná「うに」。生で刺し身にする。
- ・タカッカ takákka「かに」。
- ・ラシ rasí「しらみ」。

5. 植物について

- ・キナ kiná は「食べる草」。ムン mun は「食べない草」。
- ・ムネプイヘ mun-épuyhe「草の花」。ピリカノエプイヘ piríkano epúyhe「きれいな花だ」。
- ・ケナシ kenási というのは「太い木もなく、土も柔らかくて、一面に広く」て、村からずいぶんと行くところにある。ハフhap「クロユリ」、トマ tomá「紫色の花のヤマモ」[エゾエンゴサク]ばかりが生えているところもある。そういう所は、マタギをしている男のひとが見つけたりするので、案内をしながら、女の人が5～6人から10人くらいで連なって採りに行く。
- ・hap や tomá は手で引っ張ってぬいていた。[木の道具で掘ったりしなかったか?]そういう人もいた。この二つは同じように処理して食べる。まず、塩でゆがいて(茹でる)、ざるにあげて、マスの焼き干しを細かくしたものを混ぜる。それをご飯と混ぜて、ユリご飯にして漬物と一緒に昼ご飯にする。夜は、更におつゆがつく[漁場の食事であろうか?]。それに、トッカリの油をかけて食べるとおいしい。無い人は、魚の天ぷらなどで一回使った、しらしめ油をかけても良い。
- ・キトピロ[ギョウジャニンニク、アイヌネギ]も、山歩きしている男の人が、どこそこに畑みたいになっていたと知らせ、女の人と一緒に取りに行った。アイヌ語ではキト kitó とも言っていた。
- ・キトピロは、皮をむいて、きれいに洗った。そして、ゆがいて、トッカリ油をかけて食べた。私たちの時代は、お浸しにして醤油をかけて食べた。また、刻んで乾燥させて袋に入れて保存しておく。それを、冬に出してオハウ oháw に入れて食べる。このおいしい oháw を食べると暖かくなって、ぶくぶく太り、寒さを感じないほどで、外を駆け回って遊んだものである。
- ・冬、mákkuru を水にもどしてから細かく刻んだものと、キトピロの炊いた(ゆがいた)ものとを和える。kitó のチカリッペ cikaříppe という。
- ・ウンバイロだかうバユリだか[オオウバユリ]のことは知らない。[erapas という語は?]聞いたことがない。北海道で藤山ハルさんから聞いてそのユリのことを知った。新聞では採る人もいなかったのではないかな。
- ・チュポコ〜チポコ cupóko〜cipóko「浜のミツバ」[海岸で本人に確認。マルバトウキ]を、キトピロと同じように刻んで乾燥させて、冬に cikaříppe を作るが、私は嫌いだ。

- ・カルシ karús「きのこ」。松の木の下にあったり、柳原の中にある。ボリボリとか。おつゆに入れ
たり、煮付けたり、天ぷらにして食べた。
- ・畑では、ジャガイモ、大根、にんじん、菜っ葉、かぼちゃ、かぶ、すいかを植えていた。すいか
はできても、夏が短く秋が早いので熟さずに終わる。
- ・ヒエやアワは植えてなかったし、食べたことがない。どんなものかも知らない。畑にものを植え
ることは、ロシア人から習ったのだそうだ。アマム amám というのは、「炊いたご飯」のことだ。
- ・浜にある、黒い実のなるオタマメ otá mame[同定していない]というものがある。
- ・ヤマソバ[オオバナノエンレイソウ]の実にはヘノム〜ヘノン henóm〜henón といって、ラッキョウ
のようなもの。多来加に行けばたくさんある、ハイマツの実も henóm という。両方とも皮をむ
いて、ゆがいて食べる。乾燥させて、冬、皮を吹きとぼしながら食べた。アズキ粒ぐらいのもの。
- ・クラシノ kurásno[ガンコウラン]は、生でそのまま食べた。甘いものや、すっぱいものがある。
- ・エタカイ etákay「いちご」。
- ・カレンチ karénci[名称は英語の currant からか?]の実もよく生で食べた。山に生えているもの
が、北海道に移住後、マサラカ masáraka[砂丘上の草原]に生えていたものを庭に移して、12年
目でやっと実がついた[トガスグリと同定。実が赤く、甘い]。
- ・フレナ hurép は、真っ赤なものや、沼黒（ぬまぐろ）いものなどがある。多来加の方に多い。夏
フレナ NATSU-hurép はトゥレナ turép と呼ばれすっぱく実が丸い、秋フレナ AKI-hurép はニエリ
niéri と呼ばれ甘く実が細長い。生で食べる。ジャムを作っている人もいた。
- ・また、ジャガイモをゆでて、くずさない程度で（決してねばらさないようにして）、hurép もつ
ぶさないようにして混ぜる。イモの cikarippe という。
- ・また、半生のマスの焼き干しを細かく砕いて、hurép と混ぜて食べる。これも cikarippe。
- ・オタルッ otáruh「ハマナス」も、種を抜いて、生で食べたり、半生のマスの焼き干しと和えて、ト
ツカリの油をかけて食べる。これも cikarippe。[mawni という言葉は知ってるか?]この痛い
ところだろう[と言って、茎を指した]。
- ・cikarippe とは、五目飯のように、肉や野菜などがいろいろ入ってる「和えもの」のことで、エチ
ペ ecípeh「ベロンとした平べったい木の匙」で食べた。
- ・[cieetoy はどんなもの?]よく、年寄り世代のものを知ってるねえ。チエートイ cieetoy は、「真っ
白いバターみたいな味の土」だ。男の人が、どこか山から見つけてくるらしいが、私はあまりよ
く知らない。
- ・名前は忘れたが、この草[海岸で指されたが、まだ同定できていない]はスルク surúku「毒」だ。小

さいころ、これで草笛をしようとしたら、ひどく怒られた。だが、虫(蜂、蚊)刺されて腫れたら、この草を揉んで染み込ませると治る。葉を包帯で巻いた。

- これ[海岸で指示、テンキグサと同定]で、イテセ itése「ござを編む」というのを聞いている。ペッサム *péssamus* という⁸。鎌で刈って、一週間くらい乾燥させる。雨に当てないようにし、また、強い日差しに当てないように筵を掛けたりしていた。ハンノキの皮で煮立てて染めると、赤くなる。クロユリの花で染めると、黒くなる。実際に染めるところは見たことはない。
- ハイ hay「イラクサ」。秋、葉が落ちてから、枯れすぎない頃に、刈り取って皮をしごく。なるべく長く取るようにする。そして、洗って、1日くらい水にうるかす。そして、繊維を取る。そして、一日中寝ないで撚って、1玉作る。そして、反物にして、アツシにする。
- 生きた木は役場に盗伐として罰金を払うことになるので、枯れ木を集めた。山もきれいになる。また、犬橋でニーニ *ni*「薪」を切ったのを取りに行った。
- 夏は、浜に上がったヤーニ *yaani*「寄り木」を集めて、切って積んでおく。これは男も女もした仕事だ⁹。ニーナウ *niinaús*「薪を取る場所」。ニーナワ *niina wa!*「山へ行って薪を取ってこい」。

6. 衣服・器物

- [以下、『樺太アイヌ-児玉コレクション-』を見ながら]
- No.3~13。テタラペ *tetárape* は「反物」のこと。*tetára* は「白い」。それを作ってからアツシにするのだと思っている。[*kaa ahrus*、*kaa attus* の言葉は?]知らない。
- ニシパ *níspa*「親方、お金のある人」が着る服には文様がある。背中の文様は家紋であり、親のと同じような文様になっている。貧乏な人の服には、家紋の文様が無い。あっても、裾と襟くらい。
- チキリペ *cikíripe* は「刺繍」のこと。イミ *imí* は「着物」。[*amip* という言葉は?]アンミ *án=mi* は「着物を着る」ということ。
- 支那人が持ってきたシャツやパンツがあった。前が斜めにボタンで閉じる形のもの。[山丹服のような竜の文様の入った服は知らないか?]知らない。
- No.19~28。タマサイ *tamásay* はその人その人で、好きなように形を作っている。麻糸をなつて、それに通している。昔、支那人が売りに来たものだという。テンの皮が欲しくて来てこの玉と交換する。[*imuhsay* とも言ったか?]イムツ *imút* だかイムツサイ *imútsay* というのは、一昔前の世代が使った言葉である。

⁸ その場で、テンキ(グサ)と言ったかと聞くと、知らないと答えた。後日思い出して *pessamus* と言った。知里眞志保 1953『植物篇』では後者をカサスゲとしており、再度確認するつもりである。

⁹ 薪採りは、北海道アイヌは女の仕事としているが、樺太アイヌは男の仕事としている[知里 1944 註 38]。

- No.29～32。こういうハッカ hákka「帽子」は、敷香から向うの多来加の方の、雪が深くてロシアに近いところの人たち、犬橋に乗るような地方の人のものだろう。
- No.31、32。後頭部のところが四角くなっていて、これは、女の人へのトムイ hetómuy だろう。
- No.38～39。目の悪い人がするシカッカ～シカハカ sikákka～sikáhka は、太陽の光を押さえて、見えやすいようにするもので、これをするとうちょうど良いらしい。
- No.40～42。クツ kut「帯」。
- No.43。カーニクツ kaanikut は女の人がいづも着けているもの。何の服の上にしてもいい。カーニ kaani はグルグルの部分[真鍮の装飾]のこと。
- この帯についている、テバサキマキリはエピレケ～エンピレケ epíreke～empíreke という。カタラカタラという音になるので、小さいころはからかい半分で、後について遊んだ。トッカリの皮と脂を剥がすときに使う。これじゃないと、皮に穴があいてしまって、靴も作れなくなる。
- No.44。マエタリ maétari「前掛け」。
- No.46。ホシ hos「脚絆」。
- No.47。手袋はワンパッカ wampákka¹⁰。木綿の布で作る。皮なら何でも作る。綿ワンパッカ WATA-wampákka「綿を入れた手袋」。
- No.48。ヘチュクツ hekukúku[<he-cupu-p(頭を・すぼめる・もの)か?]という。爪先にしわが寄っているものをそう呼ぶ。こういうのは、女の人用だ。若い男の人が履いているのも見たことがあるが、ばあさんのものを借りて履いたのだと言っていた。トッカリの皮で作っているから、カムイキロ kamúy kiró。この靴の hos[脛の部分]は pónpe の皮ではないかと思う。
- No.49。ハマラキロ hamarákiro[<ham-ara-kiro(否定辞・飾る・靴)か?]という。爪先にしわが寄っていないものをそう呼ぶ。これは、男の人用。
- No.50～52。チャッチャンキ catcánki。女性の陰部に当てるもの。ラウンクツ raúnkut はこれとは違うもので、出産後に腹が垂れ下がらないように締めるもの。細長く腹の下に巻くもの。どちらも見たことはない。[男のふんどしは、cihotki?tepa?]知らない。
- No.53。女性の、信玄袋とか、カロマ～カロマッカ karóma～karomákka とかいう、針道具や、煙草、マッチを入れるものだ。
- No.54、56。男性の karóma～karomókka だ。帯に通すようになっていて、紐が輪になっているんだろう。これには、刀、マキリ、弓矢、煙草、マッチなどを入れる。これらは、副葬品にするときには、寝棺の脇に入れる。
- No.55、57。分からない。

¹⁰ mambakka または wambakka ウイルタ語で、ふたまたの厚い手袋[池上 1997]。

- No.58～62。イクニシ *ikúnis* 「男の人が神様に酒を上げるときのもの」。 *ikúnis* は女の人使ってはいけない。[初め、多田氏は槍だと思っていて、次のように言った] ヨーマ～ヨーマハ *yooma～yoomah*、獣を獲る「槍」でしょう？
- No.63～68。何だろう？ [*inaw* とか *inoka* らしいよ] ああ、 *ináw* か。私、よく知らないから[それ以上何も言おうとしなかった]。
- No.74～75。カチョ *kacó* 「太鼓」。 *tusú* をする時に *tusúkuru* が使う。[撥は *repni, rehni* というか？] テヘニー *téh nii* ？！ テヘ *teh* は「手」のことだ。[また、他日同じ問いにははっきりと答えて] 撥は テニシ *tenís* [*<te-nit(？・柄)か？*]。
- No.76～77。トンコリ *tónkori*。私の家にあった *tónkori* は、粗末になってはいけないと言うことで、どこかへ持っていかれた。
- No.78～81。ムックリ *múkkuri*。鉄のものはカーニムックリ *kaani múkkuri*。竹のものはニームックリ *nii múkkuri* という。鉄より竹の方がしなやかな音を出す。 *kaani múkkuri* の鉄の長い部分[弁]は、すぐ折れるので子供には触らせられなかった。
- No.91～93。ニーソシ *niisos*。これはトッカリや犬の肉などの実だけを載せるもので、つゆは入れないようなもの。
- No.94～100。[*cepenipapo* という言葉は？] 知らない。だけど、「魚を食べるもの」ということだろう。こういうのは、お客さんが来たときに使った[漁場での暮らしだからであろう]。
- No.101～102。シカリンパハ *sikarínpah* 「丸いもの」という意味。
- [以下、『樺太アイヌ・住居と民具』収載の山本・知里『樺太アイヌ民具』を見ながら]
- p.198 の図。オトカ *otóka* 「料理を作るもの」。ご飯や、野菜とか、魚を入れてここにかき混ぜる。
- ニーソシ *niisos* は、お客さんに出すための器で、お盆のような形をしていた。今で言えば、お皿にあたる。
- シカリンパハ *sikarínpah* は、丸い形をしていて、おつゆとかを入れて飲んだりした。
- ソールンペ *soorunpe* は、トッカリ油を作るときにも使ったが、平らになっていて、柄が長くて、つゆを入れないで、魚だけをすくったり、 *cikaripe～cikarippe* を作る時にかき混ぜるために使う。
- イメッペ *iméppe* 「しゃもじ」。少し深くなっていて、おつゆも一緒にすくうのには良い。カス *kasúh* も同じようなもの。
- [*saranis* はどんなもの？] サラニシ *saránis* は平たい食器のことだ。魚を入れたりした。もう一つ何かあったなあ。[未確認。また、p.207 の図を見て] ハンカタ *hánkata* というものもあった。よくは覚えていないが、そう言っている人がいたのを覚えている。
- ニトウシ *nitús* というものがあつた。 *hurép* 採りや、浜で貝を拾って入れたり、水を入れてバケツ

代わりにしたものがある。持つための紐がついている。形は、四角や丸だ。こういう物は、男が作り、女は作らない。

- ・ サッカ *sákka* は「箸」。つまむものだ。
- ・ エチペ *ecípeh* は、「匙のようなもの」。つゆは入らない。つゆ気の無い *cikaríppe* を食べるときに使うもの。使い終わったら、ちゃんと拭いて、箸箱のようなものに入れていた。[*ecipepoh* と言ったか?]知らない。
- ・ まな板もあった。はっきり言葉は覚えていないが、イチャニー *icánii*、*icánis*、*icáhni* [このようにいくつか言った]。イチャ *icá* は「切る」。だから「切る板」ということ。板の裏の左右2ヶ所に、太い棒を付けて下駄のようになっていた。5cm くらい高くなる。
- ・ 昔は、ホタテガイを皿にして使っていたと言う。[ホタテガイのアイヌ語名については、知里動物篇を参照し一通り聞いたが、どれも知らないという。また、*cioypesey* と言うと]チオイペ *cióypeh* 「自分たちでご飯食べたお皿」。三平皿の代わりにしたということ。
- ・ このような食器を使い終わった後は、洗ってから、木を並べ簾を置いて、その上に伏せておく。そうやって乾かす。乾いたら、箱に一式入れて、倉 *puu* にしまっていた。シントコ *síntoko* もそうだ。普段はこのような食器は使わずに、お客さんが来たときにだけ使っていた。
- ・ *sikarínpah*、*sákka*、*ecípeh* などの食器は、だれだれの物と言うように決まっていた。お客さん用のものもあった。子供用は小さかった。オイペ *óypeh* 「食器」。[*cioyneh* という言葉は?]知らない。
- ・ ピセ *pisé* は、筋を取ってきれいに洗って、イタドリを[吹き込み口代わりに]差し込んで、息を吹き込み膨らませる。好きな大きさだけ、風船のように膨らませる。そして、その状態で止めて乾かすと、そのままの形になっているものだ。じょうごで、*kamúy kee* を入れる。家の中など、日の当たらないところにぶら下げて、保存する。
- ・ マスの皮で作った着物があつた。1~2 人着ている人を見たことがある。[*kaya* と言ったか?]知らない。
- ・ *ókko* は、右の腰のところでボタンや紐で合わせる(頭からかぶる着物だ[?])。犬の皮で作ったものは セタオッコ *setá ókko* といって貧乏な人も着ていた。イソオッコ *isó ókko* はクマの皮で作ったもので一番暖かい。カムイオッコ *kamúy ókko* は、毛が短いしバサバサしていてそれほど暖かくはない。[*seta rus*、*iso rus* とは呼ばなかったのか?]言わない。それぞれ、*setá rús* 「犬の皮」、*isó rús* 「クマの皮」、*kamúy rús* 「トッカリの皮」という意味。他にも、トナカイの皮で作った *ókko* もあつた。
- ・ 犬の皮で作ったベストや半ズボンがあつて、それは、他のシャツやズボンの上から着けていた。そういう格好の男の人がいた。

- ・ オボンペ opónpe「ももひき」。寒いときに男の人が履いていた。トッカリか、犬の皮で作っていた。
- ・ シトー sitoo「スキー」。巾が広く、そこにトッカリの皮を張ったもの。坂を登るときは毛が逆立つように、下るときは滑るように張ってある。橇に乗る人も舵を取るために、sitoo を履く。[スキーのストックも sitoo kuwa か?]知らないが、私が使うような「杖」を kuwá。
- ・ かんじきは履いた。春、枯れ木を拾いに行くときだけにこれを履く。埋まらない。冬は、堅雪なので必要が無い。やまごは、いつも腰にぶら提げていた。樹の周りでは埋まってしまうらしい。[アイヌ語では tesma か?]聞いたことはある。年寄りが言っていた。
- ・ ニーポポ niipopo とは、子供の遊ぶもの。人形のようにして、オッパイ飲ませたり、泣き止ませると言って負ぶってみたりする。また、元気に育つようにという意味で、大人になってからも守り神にしてもっている人もいる。ináv でくるんだりする。[食べものをやったりするか?]いや、しない。
- ・ ガンビ[白樺の皮]は、たきつけにしたり、細く巻いたものを棒の先に付けてたいまつのようにもした。
- ・ ござを編む道具イテセニー itése nii、板状のものに1寸～1寸5分くらいの間隔で刻み目があって、そこに石に縛り付けてある糸がぶら下がっていて、草を挟んであっちに行ったり、こっちに来たりしている。[石は pit か?]知らない。石はスマ sumá。この石は、5～6cm くらいの細長い石を浜から拾ってきたもの。私も、習っておけばよかったと思っている。親たちは偉いもので暇を見つけてはござを編んでいた。ござは péssamus で作る。ござはオマイ omáy¹¹。これを家の中の壁に、ずーっと廻らせている家があった。うらやましいと思った。昔の人は、ござをソッカラ sókkara と言っていた。私たちの時代は omáy という。
- ・ ござの材料にする péssamus は草刈り鎌で刈って、一日くらいはバラバラに干しておいて、それから束ねて、立てたり逆さにしながら雨に当たらないように乾燥させる。日に当たらないように筵をかけたりする。そうすると、きれいに真っ青になる。
- ・ キテ kité「鉋」。
- ・ マレッポ maréppo[鉤鉋。アイヌ語と言う意識はないかもしれない]。
- ・ チッ cip「丸木の舟」。主に、川で使う。[tontehka は知ってるか?]聞いたことはあるが、何のことか分からない。

¹¹ Омай [omaj] 寝床、座席用の筵[ドブロトボルスキー1875]。

7. 住空間

- ・トイチセ *tóycise* という土を掘った家があった。昔は、この家に、夏も冬も住んだと言う。板が敷いてあった。30~40cm くらいの巾の腰掛けもあった。
- ・ヤラ *yará*「トドマツの皮を延ばして板のようにしたもの」を簾の代わりにしていた。また、昔の家はそれで葺いていた。
- ・刈ってきて干した草をビシッと詰めて敷いてからじゃないと、ござは敷かなかった。このことを *sókkara* というんじゃないかな？[混乱しているようだった]
- ・セッ~セ~ *set~seh*「ちょっと高い寝床」。70~80cm くらいの高さ。みんなその上で寝ていた。3~4人で寝る。小さいころ、寝相が悪くて落ちて、炉ぶちまで転がっていて、よく怒られた¹²。
- ・[窓は *puyara* か?]屋根の煙り出しの窓が、プヤラ *puyára*。また、家の奥にある半紙判一枚くらいの大きさの窓は、神様の窓で、*ináw* などはここから出し入れする。普通の戸口から出し入れすると *ináw* が汚(けが)れる。
- ・アパ *apá*「ドア」。アパトンパ *apá tónpa!*「戸を閉めろ！」。
- ・多来加の東さんのおばさん[前出]の家は、家の中の壁には、ずら一と *omáy* が掛けてあった。細長い炉が1個あり、上から炉鉤が吊り下げられていて、鍋がかかっていた。窓は、日の当たる方に2、3個あったような気がする。
- ・玄関とは反対側の裏手には、*inaús* がある。家の脇には、ゴミを捨てる場所があり、貝、その他のゴミと分けていた。
- ・*puu*「4本足の倉」の柱には、ネズミが上ってこないように、鉄板が張ってあった。倉に上るはしごは、40~50cm の太さの丸太で、女の人でも上げ下げできるように軽い木で作ってあった。使わないときは上に上げておく。サンチ *sánci*¹³と言ったかも知れない。親に、倉から物を取ってこいと言われて、どうやって上るんだと聞いたら、サンチ *sánci* だか？梯子があるだろう、と言われたのを覚えている。
- ・イソチセ *isócise*「クマの檻」やプー *puu*「倉」を持っている人は金持ちだ。

8. 信仰および自然現象

- ・“おっかない”物は何でもカムイ *kamúy* だと、私はそう思っている。
- ・海の *kamúy* は、トドとかトッカリ。山の *kamúy* はクマとかキツネ。
- ・男の人は、お酒やお菓子などを、車いっぱい載せて、*notéusi* という新聞の海の *kamúy* に祈る

¹² *inaus* の方には、足を向けて寝ないということであった。北原、丹菊両氏と共に。

¹³ 山本 1970 を参考に、*sanri* あるいは *sanni* と言うか？という質問の返答。西鶴 1942 では、冬の竪穴住居用の梯子を「プーサンツイ *Pusantui*」[<*puu-sanci*? (倉・梯子)]としている。

ところへ行く。刀を下げる紐を首から下げて行く、[emusah か?]そう言ったかもしれない。イナウカラ ináwkara とかイナウサンケ ináwsanke[意味は未確認]。ヤナギで作る。イノミアン inómi=an「お神酒をあげる」。イノンイタハ inón itáh「inomi する言葉」。アトウイカムイ atúy kamuy「浜の神様」も、ヤマカムイ YAMÁ kamúy¹⁴「山の神様」も仲良くしてよ、と言う。

- ・ 女性は、神様のことには手出しできない。神様に失礼になる。ただし、月のもの(おりもの)のなくなった年寄りのおばあさんはできる。inómi のときのお酌もする。
- ・ 年寄り世代の、家の奥の方には、神様を奉ってあるところがある。チセコロカムイ cisé koro kamuy「家の神様」の ináw(70~80cm くらいの長さ)は、戸口から見て左手奥の方にある。また、背の高い 10 本ほどの ináw が、窓の下あたりの壁に立て掛けられている。それらの ináw は正月(年の暮れ)になれば、奥の窓から出す。そして出したものは、家の裏にある inaús に並べる。inaús「古い inaw を片づけるところ」。
- ・ チセカムイ cisé kamuy「家の神様」[koro が入っていない]は男で、ウンチアッチ únci átei「火の神様」は女。夫婦なんだという話を聞いたことがある。
- ・ [『サハリン先住民の精神世界』No.18~19(ウイルタ、ニヴフのシャマンの幣冠)を見て] キキ kiki「祈りのときに男が頭に被るもの」¹⁵。
- ・ [『同』No.54~55 を見て]ウンチイナウ únci inaw じゃないか? 炉の中の、神窓、右座寄りの隅に立てるもの。
- ・ アイヌにとっては太陽の神様が一番ではないか¹⁶。何でも、月に祈る。チュッカムイ cuh kamúy。cuh「月」。月でも太陽でも。[丸い形の太陽の inaw は?]知らない。
- ・ 日食は、チュッシルキ~チュッスルキ cuh sirúki~cuh surúki[<cup-ci-ruki]。「黒くなった」ということ。そういうときは、矢をこしらえて、cuh kamúy を早く助けてやらなければならない、と言って ináw やお神酒を捧げる。病気になったということらしい。
- ・ トウスクル tusúkuru「tusu をする人」。男も女もいた。女の tusúkuru は、腰に kaanikut をしていた。病気を治す人。お札に、干し魚や米などをやった。そういう人に限って、貧乏をしている

¹⁴ яма[jama]は日本語からで、森林。-камый[-kamuy]で、森林の動物、獣[ドブロボルスキー1875]。

¹⁵ 児玉 1965 に、本文及び第 38 図に「キキ、カラフト東海岸新聞地方のもの、仲川清次郎氏作。」とある。

¹⁶ 釧路アイヌ文化懇話会 1998『アイヌモシリ』p.255 に、山本多助氏による「カラフト・モシリ ニイトイ・コタン イノミ カムイ」で、16 の名前が挙げられており、1 番目にトノ チュッ カムイ <toonocuh-kamuy (太陽・神)がある。

ことが多かった。何も無い時代だったから、tusúkuru のところへ tusú を聞きに行く楽しみもあった。金持ちの家には、蓄音機があった時代だ。

- tusú では、病気の人の命の代わりに、犬を殺して、その人の神様(セニステへ senísteh)にする。イフパ ihúspa は「tusú した後の、良いとか悪いとか言うこと」。*[kinra という言葉は?]*知らない。
- tusú の時には、フッテ hútte「マツの枝」と、ヌッチャ nútca「谷地に生えてる匂いのする、30～40cm くらいの高さの木」を焚く。どちらも匂いがするので、変なものは逃げて行き、tusúkuru の神様がその匂いで来る。tusúkuru の神様は、人によって違うらしいが、キツネとか、海や山の神様らしい。よくは知らない。
- 春日三郎さんの奥さん[フミ、コタルンケ]の、家の中でやった tusú は何度も見に行った。
- セニステへ senísteh「お守り」と言って病気をした人がもつものがあり、これには、niipopo だけの場合や、ináw でくるんだ niipopo の場合、ináw だけの場合もある。tusú してもらって、神様に聞いてから作るもの。死んだ場合は、*[その inaw を]*土饅頭の頭の部分に立てる。
- 病気になったり、占いをするときには、パンカ páńka「お化け」と言って、niipopo のようなものの腰のあたりに紐を結びつけ、ぶら下げて持ち、話し掛けるとそれに反応して動くものがある¹⁷。具合の悪い人が出たりすると、それを持っている人のところで、どこが悪いのか？治るのか？などを占ってもらう。別に、tusúkuru がしなくてもいい。このほかにも、何か占いのための道具があったらしいが、私は知らない。
- イム imú をする女性が一人いた。tusúkuru とは関係が無い。こちらがアッと言えば、アッと言ったり、飛んだり跳ねたりしていた。
- タラハ taráh「夢」。夢でなんでも判断したらしい。私も、亡くなった祖先の夢を見ると、仏さんや火の神様に、また、浜へ行けば海の神様や、山へ行けば山の神様に、お神酒を買って持って行って、こぼしてくる。
- *[keta や nociw は?]*知らない。年寄りや男は、星で方向を知ったらしい。
- menás だか masárapa だか、他にも風の名前があった。詳しくはよく知らないが、雲や風で時化るか雨になるか知った。
- タント シリピリカ tánto sirípiríka「今日は天気がいいね。今日は暖かいね。」。アットラン áttoran「雨が降る」。オパシラン opás ran「雪が降る」。セーセイ seesey「暖かい」、tánto seesey。アンペネセーセイ ánpene seesey「本当に暑い」。メーライキ meerayki「寒い」。

¹⁷ 和田 1959 に新聞の例として説明があり、これを追確認できた意味でも貴重な口述である。

- ・ヌーマン nuuman「昨日」。シンマ sínma「明日」。オヤシンマ oyasínma「明後日」。「一昨日は oya nuuman か？」分からない。
- ・アトウイ atúy「海」。アトウイルフ atúy ruh「流水」。「apu という言葉は？」知らない。ナイルフ nay ruh「川の氷」。
- ・オタルー otá ruu「浜の道」。
- ・ヌブル nupúru「山」。「sikuma とはいうか？」知らない。

9. 人間観

- ・アイヌ áynu もエンチウ énciw も「人」のこと。タンアイヌ tan aynu「この人」。ターアイヌ taa aynu「あの人」。
- ・シネウエンクル siné wen kuru「1人の悪い人」「スメレンクルという言葉聞いたことがあるか」という問いに、聞き間違えてこう答えた。
- ・ナンナ náнна「お母さん」。アパハ ápaha。アパ ápa!「お父さん」。呼びかけるときに使う。「兄、姉、弟などは？」知らない。
- ・ヘンケ hénke、チャツチャ cázca は、どちらも「おじいさん」。違いはとくにない。アッチ átcí「おばあさん」。アチャポ acápo「おじさん」「海岸を歩いている初老の男性を指してこう言った。ウナッペ unáppe「おばさん」。
- ・トート tooto「赤ちゃん」。アントート án=tooto「私の子供」。「poopo(知里人間篇より)とは言わないか？」言わない。「男も女もそう言うのか？」男の子は、オッカイポー ókkaypoo。女の子は、マハネクッポー máhnekuh poo。
- ・オッカヨ ókkayo、オッカイポー ókkaypo「男」。ポー poo は「子供」のこと。
- ・マハネクッ máhnekuh～マツネクッ mátnekuh「女」。「menoko は？」これは、日本人がアイヌの女性を指して言う言葉。
- ・サパハ sapáha、サパッカ sapákka「頭」だが、子供の言葉では、アンマ ámma。サパヌマ sapánuma「髪の毛」。numá「毛」
- ・「目は、sis と言うか?と聞くと、聞き違えて」チシcis? いや、目は、シキヒ síkihi「目」。アンシキヒ án=sikihi「私の目」。
- ・チャルフ cáruhu「口」。
- ・エトウプイエへ etúpuyehe、エトウプイ etúpuy「鼻」。キサルフイエへキサラプイエ kisárupuye

～kisarápuye「耳」。レクッ～レクッ rekúh～rekút「喉」。

- ・テへteh、テキヒ tékihi～tekihi「手」。モンペチュ mónpecu「指」。親指などの名称は知らない。チャーカイテキヒ cookay tekihi「私の手」。エアニテキヒ eáni tekihi「あなたの手」。
- ・ホニヒ hónihi「腹」。
- ・ウックイ úskuy「尻」、子供は言えないのでウックイ úkkuy と言う。
- ・ケマハ kemáha「足」。
- ・トーホ tooho「おっぱい」。
- ・チーcii「男陰」。ポキヒ pokíhi「女陰」。モコロ mokóro「男と女が寝ること[性交]」。
- ・子供を寝せるのに、赤ちゃんをくるんだ大きな風呂敷や、毛布、着物を、紐で上からぶら下げて、揺すったりしていた。また、横にも紐をビーンと延ばしている[？要確認]。昔、ネズミが床に置いておいた赤ちゃんの目などをかじったから、このように吊るすようにしたのだという。[cahkaは聞いてない。sintaか？]名前は分からない。
- ・男の子は、小さいころ、額のところにホッチリ hótciiri というもの[はじめ思い出しながら、ソッチリ sótciri とも言っていた]をしていた。縦約5cm～横約7cmの長方形の黒い木綿の布を額に当てるようにして、その横に同じ黒布の細い紐を両方に付けて、鉢巻きのようにして後ろで縛っていた。その黒布の下部分からは、3本に分かれた髪の毛が下がっている。布に付けているのかもしれない。小さいころに新聞で、これをしている男の子を見たことがあった。多分、16～17歳の大人になって外すんじゃないか¹⁸。[hotciiriで玉を付けた人は？]知らない。
- ・女の子は布が無く、前髪を3つに分けて垂らしている[編んでいた？]。そして、おかっぱにしている。結婚するようになると、止めるんじゃないか。
- ・女性の文身は、嫁に行った(結婚した)印。入れ始めると、一週間くらい物が食べられないという話だ。樺太では、口の周りに少し入れるだけ。手に入れている人はいない。北海道のように口の周りに大きく入れたりしなかった。
- ・女性は、自分で肌襦袢など、何から何まで作れるようにならなければならない。できるようになるまでは親が教える。
- ・ウサム usám「結婚する」。私たちの時代は自由だったが、昔は親同士が話し合って取り決めた。アイヌ式の結婚式は見たことがない。
- ・ポーコロ poo koro「子供ができた」。私が生まれたころは、産婆が2～3人いた。産婆にも上手下

¹⁸ 髪型については聞いてない。しかし、樺太西海岸と違い、東海岸の小児男子の髪型は前髪を残さないという報告があり[児玉ほか1941]、布を使うというのはこれを裏付けているのかもしれない。

手があつて、へその緒が大事だという。処置によっては、そこから腐って子供が死ぬということもあつた。お礼は、干魚や、生魚、トッカリ肉などを獲れたときにあげたり、米を俵で買ってあげてる人もいた。人の面倒を見る人に限って、貧乏をしていた。産婆と *tusúkuru* は関係無い。

・ トー(ホ)エーレ *too(ho) eere*、「おっぱいを飲ませろ」。 *eere*「食わせろ」。

・ 女の人、おかっぱ頭で、耳の下辺りで長さをそろえている。そして、頭の真ん中で分けて、横へ分けている。だから、ヘトムイ *hetómuy* をしているのだろう。耳にはニンカリ *nínkari* をする。かぶれてしまわないように、最高級の金の環をすると言うことだ。

・ 女の人、正座した脚を崩すように右に出して座る(横ねまり)。そして、手は、片方の手で、もう片方の手の甲を覆うようにして組み、膝の上に置く。どちらが上でも関係はない。

・ 男の人、あぐらをかく。

・ アイヌコタン *aynu kotán*「アイヌの村」のあるところには、そのすぐ裏などに墓地がある[たとえば距離を示してもらったところ、およそ 100m ほどである]。 *sínurappa* するときくらいしか行くことはない。普段は近寄らない。

・ 女の人、墓地へ行って、シヌラッパ *sínurappa*「今、来たよ」と言って、アラッケ *arákke*(サケ *saké*)「酒」やタバコ、食べ物、お菓子などをばらまいてくる。ある人が、何年かぶりに来たので墓地の被葬者みんなに(親戚でもない人にも) *sínurappa* する、と言っていた人がいた。冬でも、ご馳走ができれば、お墓まで持って行ってあげる。故人が *hurép* の *cikarippe* が好きだったら、作ったときは持っていったりした。 *icárapa*「何でも物をナゲル(撒く)」。草でも木でもみんな食べるように、ということらしかった。

・ 老人が死ぬと、この草[前項のテンキグサ]でござを編んで、死体を巻いてから寝棺に入れる。棺桶は、棒に前後 2ヶ所で紐でぶら下げて、前後で 2人ずつで担ぐ。北枕に埋める。

・ 昔の人の塔婆は、板のようになっていて、それぞれに違った彫刻を掘る。[東海岸の墓標に特有の、孔に棒を通してあるものについて。『サハリン先住民の世界』p.30 の写真を見せて]倒れていたから、つかえ棒をしたものじゃないか。

・ 昔の年寄りの墓には、土饅頭の上に背丈ほどの彫刻をした棒状の板を置いてあつた[彫刻のある棺の蓋だと思われる]。誰その墓だと言うことが分かるように、家紋が入っている。[*itokpa*, *itohpa* か?]分からない。

・ 年寄りの世代の人、アイヌの習慣で送ってもらわないと、地獄に行くことになって、親、兄弟のいるところ、極楽に行けないと言っていた。だけど、送る側もアイヌの習慣を知らないと言があたりなので、きちんと知っている人を馬橋などでわざわざ迎えに行く。[*tusso* は?]知らない。

- ・新聞でそういう昔ながらの葬式は 2～3 度見たことがある。私たちのような若い世代はみんな、日本風に葬式をしていた。
- ・人の家を訪問するときは、玄関の外で、イランカラッテ～イランカラハテ iránkaratte～iránkarahte「こんにちは。久しぶりだね」という。[戸を叩いたりはしないか?]しない。玄関のところにひざを折って坐り、iránkaratte と言って、頭を下げる。そして、玄関から入ってくると、アフンアフン ahún ahun とか、アフンカネーahún kanee「入りなさい」または、リキンリキン rikín rikin とか、リキンカネーrikín kanee「上がりなさい」と言って家に入れる。家によって、ニワ(土間)が低いところもあるから、それぞれに言う。すると、お客さんは、イヤイライケレ iyáyraykere「ありがとう」といいながら、腰を屈めながら入ってくる。
- ・男の人や年を取ったばあさんは、奥の方に座られる。若い女の人や家の方は、玄関に近いような台所の方(端の方)に座る。アイヌの人は、お客さん(人)の前を通ることをすごく嫌がる。ちゃんと後ろや端を通る。お客さんが来ると、子供たちは外へ追い出される。
- ・いつも会う人は、外で会ったら、いつ来たの?とか、どこ行くの?とか挨拶する。一年ぶりとか、久しぶりに会った人とは、女の人同士では、色々話しながら、握手したり、頬っぺたにチューとキスしたりしている。男の人同士は、難しくてよく分からない。手を取り合ったり何かしている。
- ・物をもらったときなどは、iyáyraykere と言いながら頭を下げつつ、手にしたものを軽く上下する。
- ・ピリカノオマン piríkano omán! 去って行く相手に言う言葉。
- ・タバコは、タンパク tánpaku。男も女も吸う。イクーikuu「煙草を飲む」。イクーワ! ikuu wa! 「タバコを飲みなさい」。昔のもので、自分で木を削りぬいて作ったキセルはトゥルッカ turúcca[<ロシア語 тpyбка]。刻み煙草だから、kamúy とかには少しずつつまんであげる。タバコは Kiriyaaku や Órokko の方から来たものらしい。

10. 言語情報

- ・クーkuu「飲む」。クーレ kuure「飲ませろ」。ワッカエンクーレ wákka en=kuure「水を飲ませてくれ」。クーワ kuuwa!。
- ・アラッケ arákke もサケ saké も「酒」。焼酎でも、何でも「辛い物」をこう言った。
- ・マハネクッ アンペネ イホシケ máhnekuh ánpene ihóske「女がすごい酔っ払っていた」。イホシケ マハネクッ ihóske máhnekuh「酔っ払った女」。
- ・アラカ aráka「痛い」。
- ・ユーカラ アンキーyuukara án=kii! 「歌を歌おう」。

- ・ユーカラ アンキ イサム *yuukara án=ki isám*「歌はできない」。
- ・アイヌ イタハ エラミシカリ *áynu itáh erámiskari*「アイヌ語を知らない」。「できない」ということは *erámiskari* という。簡単な言葉では *isám~isán*。
- ・メーライキ イサム *meerayki isám*「寒くない」。
- ・エラマサッペ *eramasáppe*「ばかだ」。私は、親たちが話している会話で、分からないことを質問すると、決まってこのように言われたもんだ。サッペ *sáppe* とも。藤山ハルさんたちによれば、西海岸では、オキサッペ *okisáspe* と言うそうだが、新聞辺りではサパウエン *sapá wen* とも。
- ・アイカッペ *aykáppe*「下手くそだ」。女の人なら針仕事もろくにできないような人のことをいう。男の人ならマキリの鞘などに木彫りなどきれいにできない人。
- ・セタポ *setápo*「犬の仔っこみたいだ」、アイヌの年寄りが、朝鮮人や日本人などとの混血である子供をさして、馬鹿にしていた言葉。
- ・セタサパッカ *setá sapákka*「犬の頭で、ハンカクサイ(馬鹿だ)」という意味」
- ・オヤシ *oyási*「化け物」。悪口で、ヘマタオヤシ *hemáta oyási*！「何だこの化け物！」。[*kosimpuy* は?]聞いたことがない。
- ・シネへ *sinéh*「1」。トゥッ *tuh*「2」。テへ *teh*「3」。イーネへ *iineh*「4」。アシヒネへ *asíhneh*「5」。イワンペ *iwánpe*「6」。アラワンペ *arawánpe*「7」。後は知らない。[*tupes* *sanpe*、*tupes*、*sinepes* *sanpe*、*sinepes* などとは言わなかったか?]知らない。
- ・タハヘマタ? *tah hemáta?*「これ何?」。
- ・ヘンパッペ *hénpappe*「何個?」。
- ・タラアイヌ、ヘマタアイヌ? *tará áynu hemáta áynu?*「あの人はどこの人?」。
- ・タハナータ? *tah naata?*「これ誰?」タハアイヌ、ナータ? *tah áynu naata?*「この人は誰?」[これらは、写真の人物を尋ねる設定として答えてもらった]。
- ・タハナー、タハナー *tah naa tah naa* [どちら?という言葉を言ってもらおうとしたら、こう答えてくれた]。
- ・タハテマナアンカラ? *tah temána án=kara?*「どんな風にするの?」。

11. 口承伝承

- ・ハウキ *háwki* は男の人がやるもので、今で言う浪花節じゃないか。高い枕に頭を付け仰向けになり、脚を組んで左右に揺らして、拍子をとっている。[拍子木での拍子とりは?]他の部落でそう

すると聞いたことがある。冬、夜中から朝までやることもある。háwki は、昔のことをなんでも知っている人がやる。やる人が来るからと言うと、みんな集まって来て聞く。また、上手な人がいると、馬橋で迎えに行ったりもした。

- ・ オイナ óyna。女の人が、歌のようにやるもの。
- ・ トウイタハ túytah「昔話」は男も女もやる。お化けの話や子供の話があった。
- ・ 昔、新間とトヨクシの間に、お化けが出て人を脅かしたり、迷わせたりするので、夜、年寄りで勇気のある男の人がその正体を突き止めると、裸の子供のお化けだった。道端で、這ったり、立ったりしていた。走れば追いかけてくるという。結局、生まれてまもなく捨てられた子供の魂が出てくるのではないかということになったという話。[トウイタハの例として話した]
- ・ ウチャシコマ ucáskoma は男も女もやる。nee manu「そうだとさ」というと、聞いている人がボンと床を手で叩いていた。よその部落での、変死者の葬式の話をも ucáskoma みたいに話しているのを聞いたことがある。
- ・ [(ピウスツキに説話を語った多来加の)シシラトカという人を知っているか?¹⁹]知らない。
- ・ トンチ tónçi は昔話に出てくる、小人(こびと)のことで、大人でも子供くらいの大きさという。ロシア人が Órokko の先祖ではないかと言った。土の穴を掘って住んでいて、悪いことばかりをしていた。アイヌは、あれは本当はオヤシウタリ oyási utári「化け物」じゃないかといっていた。ucáskoma に出てくる。
- ・ [topoci や屁こきお化け²⁰の話は?]知らない。
- ・ 多来加や敷香辺りに住んでいたアイヌと Órokko の戦争の話もちよっとだけ聞いたことがある。アイヌの家に火をつけたらしい。泥棒話もあった。
- ・ イフンケ ihúnke「子守り歌」。私はできない。

・ ♪ サッポー トロロー ケーラアンペ saspoo tororo keeraanpe ♪

[昆布について口ずさんだ節]

・ ♪ ヘーチョーイチョイ ヘーチョーイチョイ hee cooy coy hee cooy coy ♪

♪ ヘム ハ ワ hem ha wa ♪

tónkori でやるヘカチヘチリ hekáci hecíri の囃子。

輪の中央で、一人は弾いて、一人は囃す。

♪ ポンテキナ カラカネ(ワ)ponteki na kara kane(wa) ♪

と言うと、両手をそれぞれ逆に横方向に動かして、打つ。

¹⁹ 藤村 1983 に、Sisratoka に関する興味ある追跡調査がある。

²⁰ 知里 1953a に、「10 ヤイレスポがへっぴりおやじを退治する話」とあるものを意図した。

♪サパハ(アンマ) ナ カラカネ(ワ)sapaha(amma) na kara kane(wa) ♪

と言うと、手を耳のところに当てて、頭を左右に振る。

♪ケマハナ カラカネ(ワ)kemaha na kara kane(wa) ♪

と言うと、足を左に一步ずつずらしていく。

♪ウシクイ(ウックイ)ナ カラカネ(ワ)uskuy(ukkuy) na kara kane(wa) ♪

と言うと、両手でお尻をたたくようにして、腰を左右に振る。

- ・ [紋別市立郷土博物館所蔵の西平ウメさんのテープを聞いて]トーキトランラン too kito ran ran は聞いたことがある。歌は、節は同じだが、言葉が分からない。

・ ♪ケッケ ヘタイニ パヤン kekke hetayni payan ! ♪

と múkkuri でやる[tonkori の間違いであろう]。男が、女の人の子の家の枕元の辺りの壁の外で、このようにやり、誘い出す。好きな人同士が想いを伝え合う。

・ ♪ホッポーイヘッショーhoppooy hessoo ♪

男の人の踊りの囃子。タッカラ tákkara は年寄りの男性が神様にささげる踊り。

・ ♪チュッカワカムイラン イワナトゥイサ ソレーホイ イワナトゥイサ ソレーホイ サニマ
ウニチヌーヤ(?) cuhka wa kamuy ran iwa na tuysa sore hoy iwa na tuysa sani mawni
ci=nu ya (sani ninu wa cinu ya)(cinu mawni sanu ya hoy) ♪[最後の部分は、よく覚えていない
ようで、歌うたびに変わる]。年寄りの女性が真ん中に座っていて、みんなは輪になって踊ってい
る。hecíri にはこんな歌があった。

- ・ ヤイカテカラ yáykatekara は節が大体決まっているが、その後の、文句はそれぞれの人で違い、自由。

♪レ…レーアロー ピリカノカイノ トコイネカアネコロ

re re re re aro pirikano kayno tokoyneka ane koro…(以下繰り返す) ♪

ピリカノカイノ pirikano kayno は「自分が気に入っている良い人」ということ。

トコイネカアネコロ tokoyneka ane koro は「友達だった」。

・ ♪レ…レーアロー ニートイコタン ピリカノコタン アンコタン

re re re re aro Niitoy kotan pirikano kotan an=kotan ♪

これは、私が自分の村を誉めて(懐かしんで)口ずさむ歌。an=kotan は「自分の村」。

・ ♪シーサン チー ケーラアン アイヌ チー ケーラウェン

siisan cii keeraan aynu cii keerawen ♪

こんな風に節をつけて歌っていた人もいた²¹。

²¹ 知里 1954『人間編』p.456の第I部補注(30)に、胆振幌別の例が出ている。

参考文献

- アイヌ民族博物館 1996『樺太アイヌ-児玉コレクション-』
- 池上二良 1997『ウイルタ語辞典』北海道大学図書刊行会
- 葛西猛千代 1943『樺太アイヌの民俗』(1975 みやま書房刊を使用)
- 釧路アイヌ文化懇話会 1998『アイヌモシリー幻のアイヌ語誌復刊』
- 児玉作左衛門・伊藤昌一 1941「アイヌの髪容の研究」『北方文化研究報告』第5輯
- 児玉作左衛門 1965「江戸時代初期のアイヌ服飾研究」『北方文化研究報告』第20輯
- 高橋純一 1930「鱒とり小屋(新聞川)」(署名記事)
- 山本三生編『日本地理大系第10巻 北海道・樺太篇』改造社 所収
- 丹菊逸治 1998「アイヌ語樺太西海岸方言の-rV音節で終る動詞について」
- 『千葉大学ユーラシア言語文化論集 第1号』所収
- 知里眞志保 1942「アイヌ語法研究」(『著作集』を使用)
- 知里眞志保 1944「樺太アイヌの説話」(『著作集』第1巻の「同(一)」を使用)
- 知里眞志保 1953a「樺太アイヌの神謡」『北方文化研究報告』第8輯
- 知里眞志保 1953b『分類アイヌ語辞典 植物編』、1954『同 人間編』、
- 1963『同 動物編』(『著作集』別巻を使用)
- 知里眞志保・山本祐弘 1973「樺太アイヌの生活」(『著作集』を使用)
- 知里眞志保 1973～6『知里眞志保著作集』平凡社 (1993 第4刷を使用)
- ドブロトボルスキー1875『アイヌ-ロシア語辞典』
- キーステン・レフシン編『アイヌ語ヨーロッパ初期文献集成』第3巻 所収
- 西鶴定嘉 1942『樺太アイヌ』(1974 みやま書房刊を使用)
- ジョン・バチェラー1938『アイヌ・英・和辞典 第四版』(1981 岩波書店刊 第2刷を使用)
- 藤村久和訳注 1983「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料(3)」
- 『創造の世界』第48号 小学館
- 藤村久和・若月亨編 1994『ヘンケとアハチ』札幌テレビ放送株式会社
- 北海道立北方民族博物館 1992『サハリン先住民の世界』
- 紋別市立郷土博物館所蔵資料 西平ウメ氏によるトンコリ演奏他の録音資料
- 紋別郷土史研究会主催「アイヌ文化展」1969
- 山本祐弘 1970『樺太アイヌ・住居と民具』相模書房
- 和田完 1959「樺太アイヌの偶像」『北方文化研究報告』第14輯

(たむら まさと・千葉大学文学部日本文化学科)